

令和元年6月18日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(A) (海外学術調査)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H02601

研究課題名(和文) アフリカ漁民文化の比較研究 - 水域環境保全レジームの構築に向けて -

研究課題名(英文) Comparative Study of the Fishing Culture in Africa

研究代表者

今井 一郎 (Imai, Ichiro)

関西学院大学・総合政策学部・教授

研究者番号：50160023

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 31,600,000円

研究成果の概要(和文)：マラウイ湖南端とチルワ湖において、漁民から漁活動の概要について聞き込みを実施した。マラウイ国水産局と共同でドローン飛行によるデータ収集を実施した。中東部アフリカ地域(ケニア、タンザニア、ウガンダ、ガーナ、カメルーン、コンゴ)の漁域と魚市場において漁業関係者から漁活動に関する聞き込みを実施した。アフリカ漁民文化研究会を関西学院大学、北海道大学、弘前大学で開催した。平成31年3月に『アフリカ漁民文化論 水域環境保全の視座』(今井一郎編・春風社)を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、アフリカ漁民社会において現在生じている問題点を抽出・分析することにより、自然資源の利用秩序のあり方を統一的に理解することを目指す。それによって、水域の環境保全について「生物多様性」および地域住民の「文化多様性」の観点からアプローチする。各地域の漁民文化に備わる資源利用秩序に基づいた環境保全政策立案と実施に向け、世界の発展途上地域における「開発」と「保全」の矛盾構造の解消に繋げる意義がある。

研究成果の概要(英文)：We carried field research in the southern area of the Lake Malawi and the Lake Chilwa, and got information based on interviews from the fishers and local residents. We also carried out field researches in the fishing areas and fish markets located in the several African countries, such as Kenya, Tanzania, Uganda, Ghana, Cameroon and Congo. Study meetings were held in several times. "Cultural Study of the Fishers in Africa"(Imai I. eds., Shunpusha) was published.

研究分野：生態人類学

キーワード：アフリカ漁民 漁業文化 水域環境保全 共生 資源利用秩序

## 1. 研究開始当初の背景

世界の開発途上地域において頻発する「開発」と「保護」双方の活動の相克によって自然環境と地域社会の大規模な破壊が招かれており、問題の早急な解決が求められている。1992年にブラジルのリオ・デジャネイロで開催された「地球サミット」において「持続可能な開発」概念が脚光を浴び「生物多様性条約」が採択されて以来、陸上の環境保全だけでなく水域環境保全についても世界的な取り組みが進んできた。本研究が開始された2015年からは、国連により「持続可能な開発目標 (SDGs)」が始まり、その目標の中に水域資源の持続可能な開発、すなわち水域生態系の持続的な利用と管理が掲げられている。世界的に、水域の環境保全活動が取り組まれるようになったのである。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、アフリカ漁民社会における資源利用・管理の実態、在来知および漁民集団資源観を地域(水域)ごとに比較することでアフリカ漁民文化の資源利用秩序を解明することを目的とする。

(2) 在来的な知識に基づく持続可能な環境保全政策を立案し、アフリカ漁民社会の発展に貢献することをも目的とする。

(3) 開発途上地域で問題になっている「開発」と「保護」の矛盾構造を解消し、地域社会の住民生活にアメニティをもたらすことへの貢献も視野に入れている。

## 3. 研究の方法

研究代表者、研究分担者および研究協力者らの共同により、アフリカの4研究対象地域(水域)の漁民文化を現地調査により比較研究した。現地調査に参加した研究者の専門分野は、生態人類学、文化人類学、社会学、環境学、海洋社会学、地域研究、歴史学および資源管理計画におよんだ。

現地調査を実施した国の政府行政機関、大学と所属する官僚、研究者らと密に連絡をとり、現地住民、漁民らの間に生じている諸問題を把握することに務めた。また、マラウイ国では現地の警察、自治体と漁民らの許可・理解を得てドローン飛行による調査を実施した。

## 4. 研究成果

研究代表者、研究分担者と協力者らは、それぞれが担当する調査地域(水域)を何度も訪問し現地調査を実施した。国内の学会(日本アフリカ学会)2016年学術大会において、本研究に関する分科会を開催した。ケニア国ナイロビ市の日本学術振興会研究連絡センターが開催した「学振セミナー」において2016年8月に研究発表した。研究代表者、分担者らが分担執筆した単行本『アフリカ漁民文化論』(春風社)を2019年3月に出版した。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計15件)

中村亮・アーディル・ムハンマド・サーリフ「刺し網漁とジュゴン混獲 - スーダン紅海北ドンゴナーブ湾海洋保護区の事例」、『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明』7:95 - 104、査読有り、2019年。

中村亮「タンザニア南部キルワ島にみるスワヒリ漁業経済の変容」、『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明』6:49 - 59、査読有り、2018年。

中村亮「福井県小浜市内外海地域の郷土食ナレスシを活用した地域振興の可能性を探る」、『地域漁業研究』58(3):120 - 127、査読有り、2018年。

田原範子「死者祈念儀礼をとおして生起する共同性 - ウガンダ共和国のアルル人におけるリチュアル・シティズンシップ」、『文化人類学』83-2:233 - 255、査読有り、2018年。

伊藤千尋「VIII 海外研究 サブサハラ・アフリカ」、『経済地理学年報第64号別冊』200 - 205、査読有り、2018年。

大石高典「野生鳥獣肉の持続的な消費：日本の課題をグローバルにとらえ返す」、『農業と経済』2018年6月号、46-55、査読有り。

Noriko Tahara「Mobility as Emancipation: Viewing People on the Move in Uganda through the Dwelling Perspective」、『African Study Monographs』No.56:53-76、査読有り、2018年。

Mariko Fujimoto「Economic Impact of the dagaa processing industry on a coastal village in Zanzibar」、『African Study Monographs, Supplementary Issue』55:145-162、査読有り、2018年。

Noriko Tahara「Alternation of *Munziri* Light Fishing in Lake Albert, Uganda: From Livelihood to Labour」、『The Bulletin of Shitennoji University』Vol63:393-409、査読有り、2017年。

今井一郎「マラウイ国・内水面漁業の問題と展望(4) - チルワ湖南部・ルンガジにおける水産資源利用の事例」、『Journal of Policy Studies』No.54:1-13、査読無し、2017

年。

大石高典「民族霊長類学から見た人間と非人間の境界 コンゴ盆地北西部を事例として」『現代思想』44(22):224-233、査読有り、2016年。

今井一郎「マラウイ湿原域における水産資源利用の変化に関する一考察」『アフリカ研究』87:65-76、査読有り、2015年。

中村亮、Adel Mohammed Salah「スーダン紅海北部ドンゴナーブ湾海洋保護区の漁撈活動とジュゴン混獲問題」『アフリカ研究』87:77-90、査読有り、2015年。

中村亮、北窓時男「特集にあたって アフリカ漁民文化研究の視座」『アフリカ研究』87:29-36、査読有り、2015年。

藤本麻里子「タンザニア、ザンジバルにおけるダガー産業の構造」『アフリカ研究』87:37-49、査読有り、2015年。

#### 〔学会発表〕(計13件)

中村亮「刺し網漁とジュゴン混獲問題 スーダン紅海北部ドンゴナーブ湾海洋保護区の事例」アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明第2回国際シンポジウム：ユーラシアの現代動態、2019年。

伊藤千尋「ザンビア・カリバ湖の漁業資源をめぐる諸問題～過剰な利用はなぜ起こるのか～」日本地理学会春季学術大会、2019年。

田原範子「隔離を越えるモビリティ 逃亡・脱走・旅、文芸活動」日本文化人類学会第52回研究大会、2018年。

藤本麻里子「ザンジバルのダガー産業に対する行政の管理体制の整備：インフォーマルセクターからフォーマルセクターへ」地域漁業学会第60回大会、2018年。

大石高典「熱帯アフリカ都市住民の動物タンパク質消費嗜好性 コンゴ共和国ブラザビルの事例」日本熱帯生態学会第27回年次大会、2017年。

藤本麻里子「ザンジバルの漁村におけるダガー漁獲量の年変動と地域経済への影響」日本アフリカ学会第54回学術大会、2017年。

伊藤千尋「カリバ湖の商業漁業(カペンタ漁)における漁法の成立とその背景」日本アフリカ学会第54回学術大会、2017年。

中村亮「スワヒリ海岸キルワ島における魚需要の増加と漁村経済の展開」日本アフリカ学会第54回学術大会、2017年。

中村亮「アフリカ地域漁業の変化：タンザニア南部キルワ島に新登場した「鮮魚商売」の影響」地域漁業学会第58回大会、2016年。

中村亮「タンザニア南部キルワ島に見るスワヒリ漁業経済の変化」日本アフリカ学会第53回学術大会、2016年。

藤本麻里子「コンゴ民主共和国ルブンバシにおける魚加工品流通に関する予備報告」国際漁業学会大会、2016年。

今井一郎「アフリカ漁民文化の比較研究 水質環境保全レジームの構築に向けて」日本アフリカ学会第53回学術大会、2016年。

大石高典「森の中の近代史 カメルーン東南部・ジャー川流域の廃村の歴史生態学」日本アフリカ学会第53回学術大会、2016年。

#### 〔図書〕(計4件)

今井一郎編『アフリカ漁民文化論 水域環境保全の視座』春風社、2019年、305ページ。

藤本麻里子『東アフリカ・インド洋島嶼地域ザンジバルにおけるダガー漁と人々の暮らし』中西印刷、2016年、78ページ。

秋道智彌、大石高典「ナマズ漁撈とその多様性」秋篠宮・緒方・森編著『ナマズの博覧誌』:278-303、誠文堂新光社、2016年。

伊藤千尋『都市と農村を架ける ザンビア農村社会の変容と人びとの流動性』新泉社、2015年、291ページ。

#### 〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：伊藤 千尋

ローマ字氏名： Ito Chihiro

所属研究機関名：広島女学院大学

部局名：人間生活学部

職名：講師

研究者番号(8桁)：00609662

研究分担者氏名：中川 千草

ローマ字氏名： Nakagawa Chigusa

所属研究機関名：龍谷大学

部局名：農学部

職名：講師

研究者番号：00632275

研究分担者氏名：藤本 麻里子

ローマ字氏名： Fujimoto Mariko

所属研究機関名：京都大学

部局名：アフリカ地域研究資料センター

職名：特任研究員

研究者番号：10555105

研究分担者氏名：飯田 卓

ローマ字氏名： Iida Taku

所属研究機関名：国立民族学博物館

部局名：学術資源研究開発センター

職名：教授

研究者番号：30332191

研究分担者氏名：大石 高典

ローマ字氏名： Oishi Takanori

所属研究機関名：東京外国語大学

部局名：現代アフリカ地域研究センター

職名：講師

研究者番号：30528724

研究分担者氏名：中村 亮

ローマ字氏名： Nakamura Ryo

所属研究機関名：福岡大学

部局名：人文学部

職名：准教授

研究者番号：40508868

研究分担者氏名：田原 範子

ローマ字氏名： Tahara Noriko  
所属研究機関名：四天王寺大学  
部局名：人文社会学部  
職名：教授  
研究者番号：70310711

研究分担者氏名：丸山 敦  
ローマ字氏名： Maruyama Atushi  
所属研究機関名：龍谷大学  
部局名：理工学部  
職名：准教授  
研究者番号：70368033

(2)研究協力者  
研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。